

主体的に本と関わる生徒の育成  
—本を身近なものとする環境づくりを通して—

蟹江町立蟹江北中学校 山田 賢

1 はじめに

文部科学省によると児童生徒の「読書センター」としての学校図書館は、「児童生徒の創造力を培い、学習に対する興味・関心等呼び起こし、豊かな心をはぐくむ、自由な読書活動や読書指導の場である」と定義されている。また、「学校教育の一環として、すべての子どもに、本を選んで読む経験、読書に親しむきっかけを与える」「子どもたちが、自由に好きな本を選び、静かに読みふける場を提供して、様々な本を紹介して、読書の楽しさを伝える」とも述べられている。この「読書センター」としての機能を果たすためには、生徒が主体的に本と関わろうとするよう意識づけするとともに、学校図書館の環境を整えていく必要がある。

読書活動への関心と図書館利用の現状などを把握するために本校の1年生(138名)を対象に、令和3年4月に「読書に関するアンケート」を実施した。まず「読書が好きか」という質問に対して、「①好き」が39%、「②どちらかという好き」が41%、「③どちらかという嫌い」が15%、「④嫌い」が4%という結果になり、全体の約80%が読書に対して好感をもっていることが分かった(資料1)。

次に前年の小学校6年生時に、「どのくらいの頻度で学校の図書館に行ったか」という質問に対して、「①週に1回以上」が9%、「②半月に1回程度」が7%、「③1ヶ月に1回程度」が14%、「④3ヶ月に1回程度」が14%、「⑤半年に1回程度」が19%、「⑥1年に1回程度」が27%、「⑦行ったことがない」が10%、という結果になり、全体の約40%近い生徒が年に一度行くか行かないかという頻度であることが分かった(資料2)。同アンケートの「どんな図書館だと行きたいか」という質問に対して、「人気やおすすめの本が目立って分かりやすい」「静かで集中できる場所だと行きやすい」であった。

これらの現状を踏まえて国語科の授業を中心に、本と主体的に関わることができる活動を設定すると同時に、委員会活動を利用して生徒が本を身近に感じることができる読書環境を作ることができれば、「読書センター」としての学校図書館の機能を果たすことができるのではないかと考えた。そこで研究テーマを「主体的に本と関わる生徒の育成—本を身近なものとする環境づくりを通して—」と設定した。

2 研究の方法

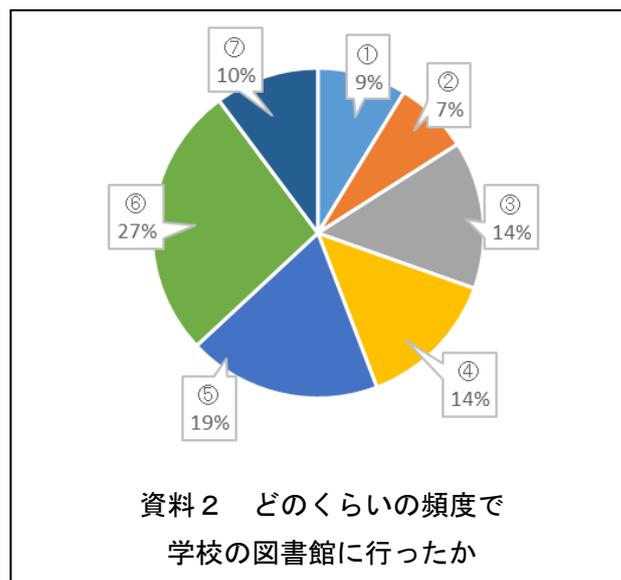
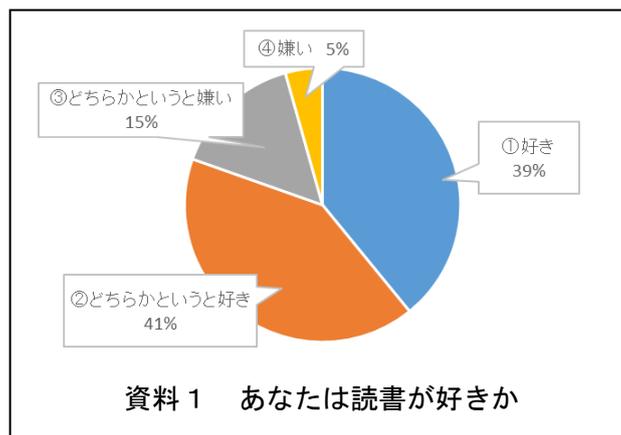
(1) 目指す生徒像

本研究では、学習指導要領や生徒の実態を踏まえ、次のように設定した。

○主体的に本と関わることができる生徒

(2) 研究の仮説と手だて

目指す生徒像に迫るため、以下に示す二つの仮説を立て、それに対する手だてを講じた。



### ① 仮説 1

図書委員の活動を通じて本についての情報に多くふれることで、生徒は図書館を身近に感じ、図書館へ足を運ぶ機会を増やすことができるであろう。

#### 手だて

- ア 生徒へのアンケートの結果、購入の希望があった作品や読書感想文の課題図書を中心に紹介ポスターを作製し、教室や廊下に掲示する。また、給食時の放送で本の紹介を行う。
- イ 3週間おきに3冊ずつ、各学級に図書館の本を置く。
- ウ POP を作製して本の魅力を視覚的に分かりやすく伝える。
- エ 定期的に図書に関するイベントを開催する。

### ② 仮説 2

授業において、生徒が本の魅力を伝え合う活動をすることで、本に対する関心を高め、本と主体的に関わることができるようになるであろう。

#### 手だて

- ア 学級で自分の好きな本の紹介を行い、聞いている生徒は誰の紹介に惹きつけられたかを、ワークシートを使って投票する。
- イ 一人一枚自分の好きな本の POP を作製し、本の魅力を伝える。クラス内でどの POP に魅力を感じたか、ワークシートを使って投票する。
- ウ グループでビブリオバトルを行い、生徒同士で本の魅力を伝え合う。誰の伝え方が最もよかったか、話し合いによって決める。

## (3) 抽出生徒

### ① 生徒 A

読書に対する意欲が高く、国語への学習意欲も高いが、図書館に行く頻度は低い。

### ② 生徒 B

読書に対する意欲が低く、図書館に行く頻度も低い。しかし、読書活動に抵抗があると感じながらも、努力していきたいという前向きな姿勢がある。

## 3 研究実践

### (1) 図書委員による実践

#### ① ポスター掲示と放送による本紹介（仮説 1 手だてア）

図書委員会の活動として、各クラスの図書委員が1枚ずつポスターを作製した。そして、その作製したポスターを廊下の掲示板に、コピーしてまとめたものを教室に掲示した（写真1）。選書にあたってはアンケートの結果、購入希望があり、新しく購入したものや、課題図書の本の中から行った。教室では、休み時間にじっくりと読む生徒の姿が見られた。

加えて、ポスターに載っている作品を、生徒が感想を交えて給食時の放送で紹介することで、本のよさが伝わりやすくなるようにした。給食時は黙食であるため、多くの生徒の耳に入っているようだった。

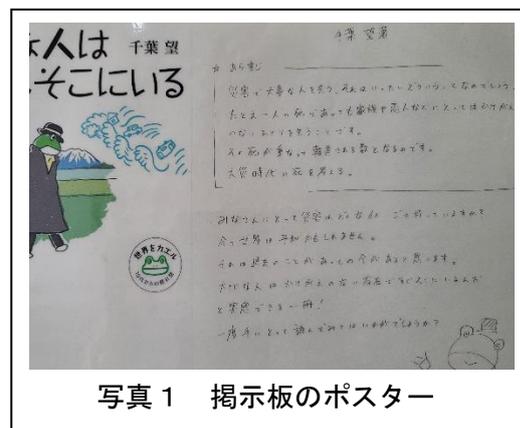


写真1 掲示板のポスター

#### ② 学級文庫の増冊（仮説 1 手だてイ）

生徒の興味に即した本を置くことで、本への関心をかき立て、主体的にかかわる姿勢を育成するために、学級文庫に図書館の本を置くことにした。生徒の関心が向く本を置くために、選書は各学級の図書委員が行った。また、読書感想文の課題図書も各学年に1冊ずつ購入し、3週間ずつ交代で回していった。読書感想文の課題図書を置くねらいは、課題図書を知らない生徒や、興味はあってもわざわざ探してまで読もうとしない生徒に学級という身近な場に図書を置くことで、本への関心が高まるのではないかと考えたからである。しかし、実際は本に興味こそ示すものの、なかなか借りて読むところまで至らなかった。

### ③ POP 作製 (仮説 1 手だてウ)

新しく入荷した本や図書委員のおすすめの本が一目見て分かるようにするため POP を作製した。また、これまではそれぞれの分類の棚に最初から本を置いていたが、新作の棚と図書委員のおすすめ作品の棚を新たに確保した (写真 2)。その結果、かなりの頻度で借りられることが分かり、図書館の活性化について一定の効果をあげることができた。

### ④ イベントの開催 (仮説 1 手だてエ)

一つ目は、6 月と 11 月の毎週火曜日と木曜日に、本を借りた人へしおりを配付するというイベントを開催した。開催する月の最初の朝礼で全校生徒に告知し、しおりに印刷したイラストと図書室の開架時間を記載しておくことで、2 回目以降の来館を促すよう工夫した。実際、火曜日と木曜日の開架時には、水曜日と木曜日に比べ来館する生徒が多かった。

二つ目は、2 月に POP コンテストを行った (写真 3)。おすすめする本の POP を図書委員が作製するだけでなく、全校生徒から有志での参加を放送とポスターで募った。来館した生徒は作製された POP を見て、気に入ったものに投票をした。そして、投票の結果、上位 3 名には放送朝礼にて表彰を行うことで、POP 作製や投票を通じて本に対する関心を高めるようにした。

## (2) 授業における実践

### ① 本紹介 (仮説 2 手だてア)

本を紹介するために、まずはじっくりと本を読み深める時間が必要であると考え、国語科の授業で 1 時間、静かに集中して読む場を設定した。次に、特に紹介したい場面を一つ抜き出し、その理由も踏まえてノートにまとめさせた。その後、原稿用紙に紹介文を書くことで具体的で分かりやすいスピーチができるようにした。原稿用紙に書き出すことが苦手な生徒も事前に場面を決めておくことで、スムーズに書き出すことができた。

発表の際には、話し手に「聞き手の顔を見ること」「間を取ってゆっくり自分の伝えたい場面について話すこと」を指導し、聞き手には「話し手の顔を見ること」「話し手がどんな話をしているかよく聞くこと」を指導した。発表の様子としては、聞き手が真剣に相手を見ながら、級友の紹介する本に興味をもって見えた。その後、ワークシートにて投票を行い、特に支持を集めた 2 名を学級内で表彰した。また、その 2 名が紹介した本を購入し、図書館に置くことで、図書館に行くきっかけとなるようにした。

### ② POP 作製 (仮説 2 手だてイ)

教科書の見本を参考にしながら POP 作りを行った。手だて 1 の本紹介と大きく異なるのは、話すのではなく文章で説明をするという点と、絵やイラストを描いて視覚的に興味をもたせる必要があるという点である。自分の好きな本の表紙や挿絵を描く生徒もいれば、全く別の、オリジナリティのあるイラストを描く生徒もいた (写真 4)。POP を描き出すのが難しい生徒には、まず端的に魅力をまとめた上で一言感想を考えさせ、タイトルを大きく書くように指導をした。分量が少なくても POP は成立することが分かると、生き生きと活動を行う様子が見られた。



写真 2 おすすめ作品の棚



写真 3 POP コンテストの作品

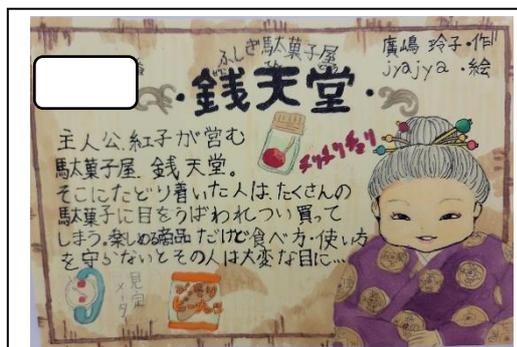


写真 4 生徒の POP

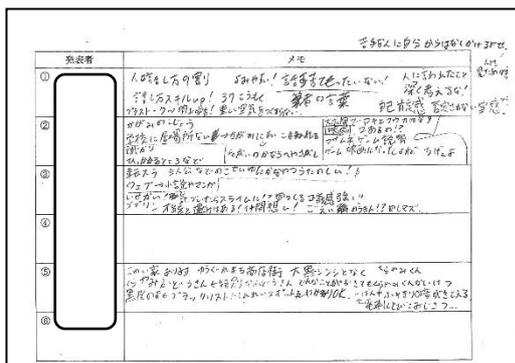
その後、本と POP を並べて学級内で審査会を行った。一つ一つ全く異なる POP をじっくり時間をかけて眺める姿が見られた（写真5）。ワークシートでの投票の際は、非常に悩みながら、何度も POP を見直す生徒が多く、自分が読んだことがない本への関心を高めることができた。



写真5 審査会の様子

### ③ ビブリオバトル（仮説2手だてウ）

ビブリオバトルを行う準備として、まずワークシートに本の読みどころやおすすめしたいところを、理由を踏まえて箇条書きでまとめさせた。書き方をワークシートに例示しておくことで大半の生徒はすぐ書き出すことができた。次にそれを文章化し、他者に分かりやすくなるよう具体的に書かせた。その際、余力がある生徒には予想される質問を考えておくよう指導したことで、より詳しく読み込む姿が見られた。



資料3 生徒のメモ

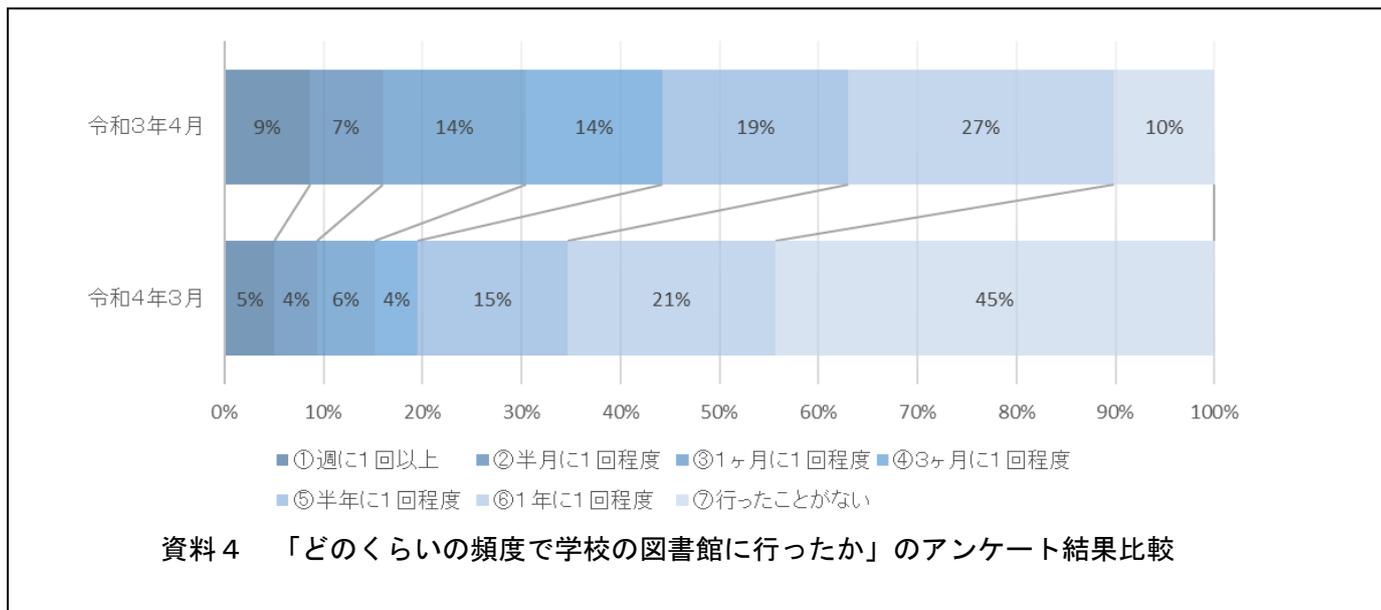
ビブリオバトルは5～6人のグループで一人発表時間3分と、質問時間2分に区切って行った。話し手は前述した本紹介での留意点を意識して行った。さらに、本の表紙や挿絵を見せる生徒や、ジェスチャーを用いて説明する生徒、事前に書いたイラストを見せる生徒などもいた。また、聞き手側も相手に質問をするため、以前よりもメモを取り、真剣に聞く姿が見られた（資料3）。ビブリオバトルの後に、話し合いで、具体的な根拠を述べながらよかったところをまとめたり、より詳しく知るために質問したりし、誰の紹介が最もよかったのかを決定していた。

## 4 研究の結果

### (1) 仮説の検証

#### ① 仮説1について

令和4年3月に「読書に関するアンケート」を再度実施した。仮説1に対する手だてが、図書館へ足を運ぶ機会を増やすことに役立ったかを把握するため、「どのくらいの頻度で学校の図書館に行ったか」と尋ねた結果、資料4のとおりであった。



資料4 「どのくらいの頻度で学校の図書館に行ったか」のアンケート結果比較

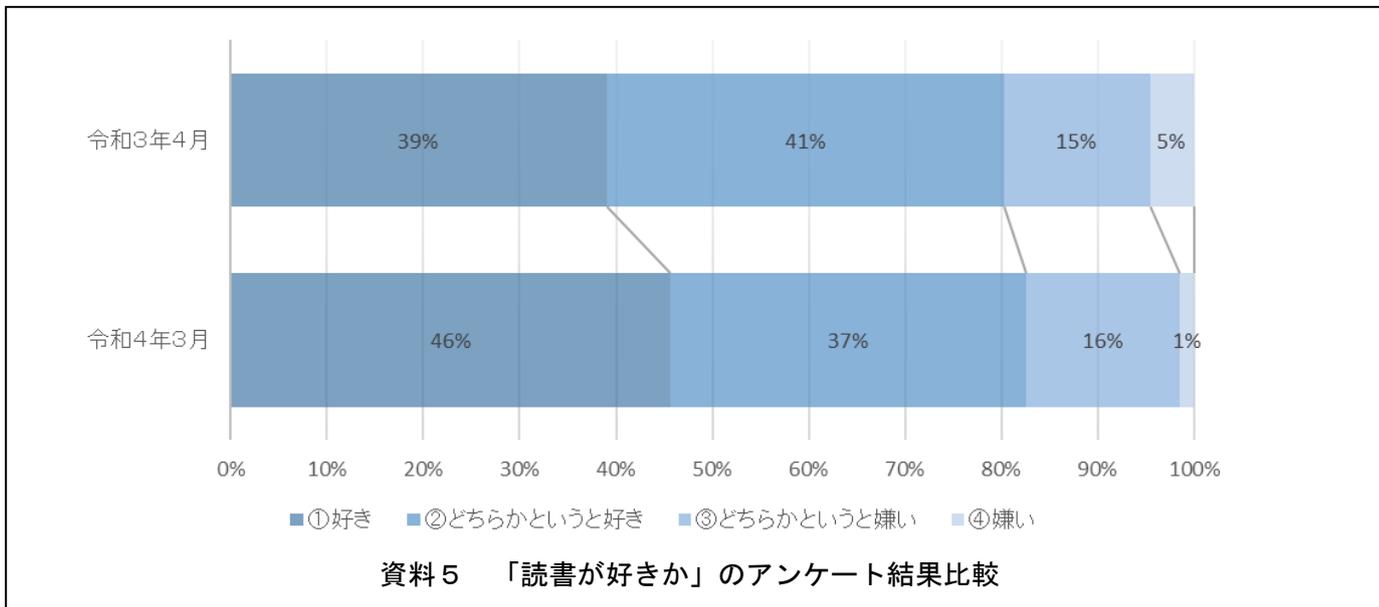
令和3年4月では「⑥1年に1回程度」が27%、「⑦行ったことがない」が10%という結果だったのに対し、年度末では「⑥1年に1回程度」が21%、「⑦行ったことがない」が40%という結果になった。

行く頻度が減ってしまった生徒の意見としては次のようなものが挙がった。

「休み時間が短くなって小学生のときより行かなくなった」「昼休みにしか開いていない」など、本校の休み時間と開架時間の都合に関する声が多かった。また、「自分で本を買うようになったため」といった本を借りること自体減ってきたという声もあった。

② 仮説2について

同じく令和4年3月に実施した「読書に関するアンケート」で、仮説2に対する手だてが本に対する関心を高め、本と主体的に関わるようになったかを把握するため、「読書が好きか」を尋ねた結果、次の資料5のような結果になった。

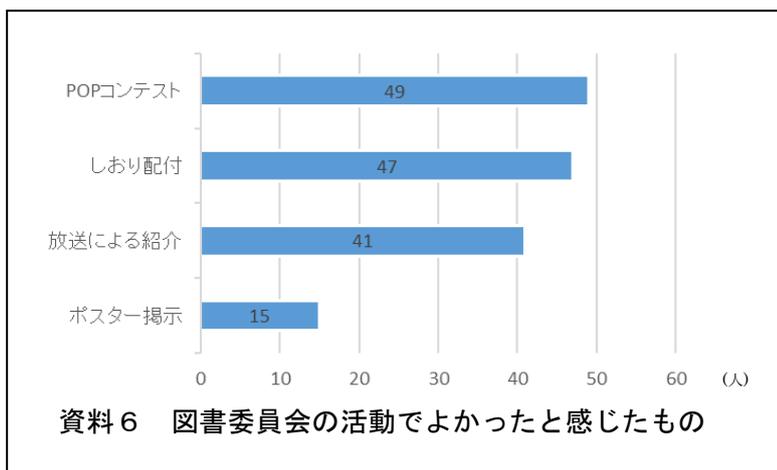


令和3年4月では「①好き」が39%、「②どちらかという好き」が41%という結果であったのに対し、「①好き」が46%、「②どちらかという好き」が37%とさらに向上した。読書が「好き」や「どちらかという好き」になった生徒の意見としては「中学生になって自分の好きなジャンルが見つかったから」「小学校の頃よりいろいろな本に触れることが増えたから」「友達の紹介で読むことが増えたから」といった本との出会いの機会が増えたことに起因するものが挙がった。

(2) 全体の変容

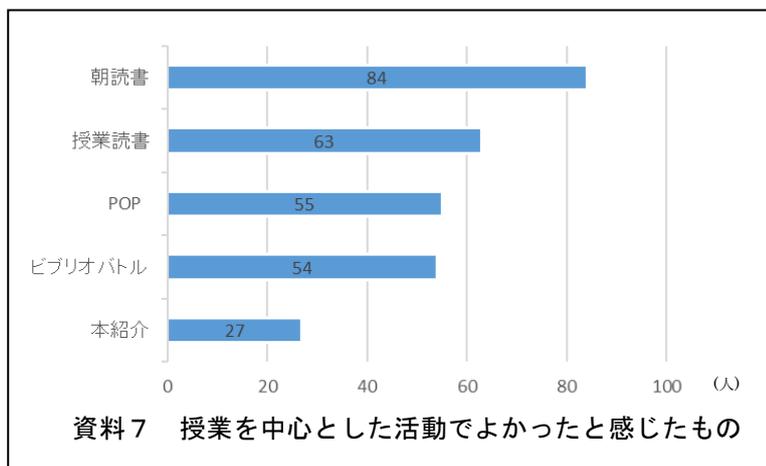
前述の仮説の検証で述べたように、図書館への足は遠のいてしまったが、本自体への関心は全体として高まった。

右の資料6は令和4年3月に実施した「読書に関するアンケート」において「図書委員会の活動でよかったと感じたもの（複数回答可）」についての回答結果である。ポスターを教室や廊下に掲示したり、朝の会で告知をしたりしたことについては、あまり認知されていなかった。



一方で、最も好評だった「POP コンテスト」については、「本についての魅力が分かりやすく伝わってくる」「見ていて楽しい」という分かりやすさや楽しさなど感覚的な意見が目立った。また、「しおり配付」については「期間限定でもらえると思うと行きたくなる」「しおりは実用的で嬉しい」という限定的な催しであることに起因している理由と実用性を重視した理由が大半であった。最後に「放送による紹介」は「新しく入荷した本やおもしろい本が分かるから」「図書委員の人がおすすめという読みたくなるから」などリアルタイムな発信に魅力を感じていることが分かった。

右の資料7は令和4年3月に実施した「読書に関するアンケート」において「授業を中心とした読書に関する活動でよかったと感じたもの（複数回答可）」についての回答結果である。本校で継続的に実施している朝読書は多くの生徒が好意的な印象を受けていた。次いで「授業時間を1時間使った読書」も多く支持を集めており、主な意見としては「長い時間集中して静かに読める時間が日頃確保できないから嬉しい」というものが非常に多く見られた。また、「POP作製」と「ビブリオバトル」は半数以上の生徒が好意的印象を受けていた。「POP作製」の意見として挙げたのは「絵で表せるから作りやすく、見やすい」「作っていて楽しい」など作ること自体への魅力を感じているものだった。「ビブリオバトル」の意見として挙げたのは「人に紹介するために、より一層読みこむことができたから」「紹介している人の本への思いがとても伝わってきたから」など本そのものへの関心の高まりが見取れるものだった。



### (3) 抽出生徒の変容

#### ① 抽出生徒Aについて

生徒Aは年間を通して、読書に親しむ姿は変わらなかった。休み時間にも読書をする姿が度々見られ、日常的に読書をする習慣がついているものと考えられる。

図書館に行く頻度について、令和3年当初のアンケートでは1年に1回程度であった。しかし、年度末では1ヶ月に1回以上と定期的に図書館を利用するようになった。その理由としては「自分の好きな本があることを知ったから」というものだった。

また、生徒Aは「図書委員会の活動でよかったと感じたもの」について回答したのは「放送による紹介」であった。理由には「どんな本が人気なのかやどれがおもしろいのかすぐに分かったから」との記述があり、放送の内容で興味を惹かれ、図書館に足が向いたようであった。

#### ② 抽出生徒Bについて

生徒Bは年度当初では本が嫌いであったが、年度末にはどちらかというところ好きに変容していた。この生徒が「授業を中心とした読書に関する活動でよかったと感じたもの」についての回答したのは、「朝読書」「授業時間を1時間使った読書」「本紹介」「ビブリオバトル」を選んでおり、「これらの活動を通じて読むことが増えた」という理由を述べていた。これまでに比べて、授業内で本に関わる活動を多く体験したことが、本を好きになるきっかけになったと考えられる。

## 5 研究の成果と今後の課題

本研究において、継続的に本に関する活動を取り入れていくことで、生徒の本への関心を高め、主体的に本と関わる姿勢を育むことができた。きっかけを与え続けることで生徒の本への関心を少しずつ高めていくことができた。実際、普段の生活の中で、本を話題にする生徒や、本の感想を教師に伝える生徒が年度当初より増えた。

しかしながら、本校の図書館へ足を運ぶ生徒は実際のところ多くはない。主な理由として生徒から挙げられたのは、「休み時間が短い」や「開架時間が短い」というものである。図書館の開架時間を延ばしたり増やしたりすることは現実的には難しいため、教室や廊下などに、より一層手軽に借りることができる環境を作っていく必要がある。加えて本校では現在、図書のパッケージによる管理に移行している最中であるため、貸出に時間がかかり、探したり調べたりすることも容易ではない。今後図書館の設備を整えることで、生徒も手軽に学校図書館を利用しやすくなると考えられる。

今後はGIGAスクール構想により一人一台のタブレットも導入され、電子書籍の利用やオンラインでの検索などが手軽になっていくことも考えられる。授業において生徒同士で交流させ、本の魅力を感じさせながら、読書に親しむ機会が増えるように図書館の環境を整えていきたい。加えて、デジタルツールを活用した方法を導入していくことで、より主体的に本と関わる生徒の育成を目指していきたい。